

蛇と三輪山

蛇が三輪山の御神体である

とする信仰は、古くからあったようだ

大神神社に中山和敬、学生社、一五六頁参照

三輪山の蛇とは、あるは本来、ちよろち

うと天を舐めるかのような阿蘇の火を表わ

していたのではなからうか

こに、蛇と三輪山にまつわる話

を、二つとりあげてみよう

雄略天皇の七年、天皇は少子部連

言脚に詔して、

朕は、三諸岳の神の形を見たかと思ふ。

おまえは、力が人にまさっている。自ら行つ

て捉えてこい

と仰せられた。

そこで螺言脚は、三諸岳(神山)に登り、

大蛇を捉えて、天皇にお見せした。

天皇は斎戒なさらなかつた。其の大蛇の雷の

ような音は、鳴き、目精は赫赫した。天皇は



来 ① 2631 15 3/3 16斤

③ 2631<sup>7</sup> 15%~



奈良県桜井市茶臼山古墳（四世紀築造）の  
 無<sup>い</sup> 奈<sup>な</sup>良<sup>ら</sup>県<sup>けん</sup>桜<sup>おう</sup>井<sup>い</sup>市<sup>し</sup>茶<sup>ち</sup>臼<sup>やう</sup>山<sup>やま</sup>古<sup>こ</sup>墳<sup>ふん</sup>（四<sup>し</sup>世<sup>せい</sup>紀<sup>き</sup>築<sup>ちく</sup>造<sup>ぞう</sup>）の  
 近<sup>きん</sup>畿<sup>き</sup>地<sup>ち</sup>方<sup>ほう</sup>の古<sup>こ</sup>墳<sup>ふん</sup>のう<sup>う</sup>ち、最<sup>さい</sup>古<sup>こ</sup>の<sup>もの</sup>の<sup>一つ</sup>  
 と考<sup>かん</sup>えら<sup>れ</sup>わ<sup>て</sup>い<sup>る</sup>椿<sup>つばき</sup>井<sup>い</sup>大<sup>だい</sup>塚<sup>つか</sup>山<sup>やま</sup>古<sup>こ</sup>墳<sup>ふん</sup>（京<sup>きやう</sup>都<sup>と</sup>府<sup>ふ</sup>相<sup>さう</sup>模<sup>も</sup>郡<sup>ぐん</sup>山<sup>さん</sup>城<sup>じやう</sup>町<sup>ちやう</sup>椿<sup>つばき</sup>井<sup>い</sup>）に<sup>は</sup>、埴<sup>はに</sup>輪<sup>りん</sup>に<sup>る</sup>類<sup>るい</sup>する<sup>もの</sup>の<sup>か</sup>  
 因<sup>いん</sup>みに<sup>に</sup>述<sup>じゆつ</sup>べる<sup>と</sup>、  
 古<sup>こ</sup>学<sup>がく</sup>、IV<sup>イブイ</sup>河<sup>か</sup>出<sup>しゅつ</sup>書<sup>しよ</sup>房<sup>ぼう</sup>、二<sup>に</sup>八<sup>はち</sup>一<sup>いつ</sup>頁<sup>えつ</sup>参<sup>さん</sup>照<sup>しやう</sup>（<sup>他</sup>参<sup>さん</sup>照<sup>しやう</sup>）  
 とい<sup>う</sup>の<sup>で</sup>あ<sup>る</sup>。（「古<sup>こ</sup>墳<sup>ふん</sup>時<sup>じ</sup>代<sup>だい</sup>」上<sup>じやう</sup>）日<sup>にっ</sup>本<sup>ぽん</sup>の<sup>考</sup>  
 と<sup>は</sup>わ<sup>ず</sup>か<sup>しい</sup>い<sup>し</sup>。  
 か<sup>う</sup>か<sup>か</sup>わ<sup>れ</sup>る<sup>の</sup>で、と<sup>く</sup>べ<sup>つ</sup>古<sup>こ</sup>く<sup>考</sup>え<sup>る</sup>こ  
 と<sup>は</sup>わ<sup>ず</sup>か<sup>しい</sup>い<sup>し</sup>。  
 他<sup>た</sup>多<sup>た</sup>数<sup>すう</sup>の<sup>書</sup>参<sup>さん</sup>照<sup>しやう</sup>）  
 一<sup>い</sup>か<sup>し</sup>、こ<sup>の</sup>口<sup>く</sup>箸<sup>しよ</sup>の<sup>墓</sup>墓<sup>ぼ</sup>の<sup>築</sup>造<sup>ぞう</sup>年<sup>ねん</sup>代<sup>だい</sup>は<sup>多</sup>人<sup>にん</sup>  
 な<sup>に</sup>古<sup>こ</sup>く<sup>な</sup>い<sup>し</sup>、と<sup>い</sup>う。  
 箸<sup>しよ</sup>墓<sup>ぼ</sup>の<sup>前</sup>方<sup>ほう</sup>部<sup>ぶ</sup>は<sup>寸</sup>寸<sup>すん</sup>で<sup>に</sup>発<sup>はつ</sup>達<sup>たつ</sup>の<sup>キ</sup>ギ<sup>ぎ</sup>を  
 み<sup>せ</sup>、ま<sup>た</sup>「墳<sup>ふん</sup>丘<sup>きやう</sup>」に<sup>円</sup>筒<sup>とう</sup>埴<sup>はに</sup>輪<sup>りん</sup>の<sup>使</sup>用<sup>よう</sup>の<sup>あ</sup>と  
 か<sup>う</sup>か<sup>か</sup>わ<sup>れ</sup>る<sup>の</sup>で、と<sup>く</sup>べ<sup>つ</sup>古<sup>こ</sup>く<sup>考</sup>え<sup>る</sup>こ  
 と<sup>は</sup>わ<sup>ず</sup>か<sup>しい</sup>い<sup>し</sup>。  
 とい<sup>う</sup>の<sup>で</sup>あ<sup>る</sup>。（「古<sup>こ</sup>墳<sup>ふん</sup>時<sup>じ</sup>代<sup>だい</sup>」上<sup>じやう</sup>）日<sup>にっ</sup>本<sup>ぽん</sup>の<sup>考</sup>  
 古<sup>こ</sup>学<sup>がく</sup>、IV<sup>イブイ</sup>河<sup>か</sup>出<sup>しゅつ</sup>書<sup>しよ</sup>房<sup>ぼう</sup>、二<sup>に</sup>八<sup>はち</sup>一<sup>いつ</sup>頁<sup>えつ</sup>参<sup>さん</sup>照<sup>しやう</sup>（<sup>他</sup>参<sup>さん</sup>照<sup>しやう</sup>）  
 因<sup>いん</sup>みに<sup>に</sup>述<sup>じゆつ</sup>べる<sup>と</sup>、  
 近<sup>きん</sup>畿<sup>き</sup>地<sup>ち</sup>方<sup>ほう</sup>の古<sup>こ</sup>墳<sup>ふん</sup>のう<sup>う</sup>ち、最<sup>さい</sup>古<sup>こ</sup>の<sup>もの</sup>の<sup>一つ</sup>  
 と考<sup>かん</sup>えら<sup>れ</sup>わ<sup>て</sup>い<sup>る</sup>椿<sup>つばき</sup>井<sup>い</sup>大<sup>だい</sup>塚<sup>つか</sup>山<sup>やま</sup>古<sup>こ</sup>墳<sup>ふん</sup>（京<sup>きやう</sup>都<sup>と</sup>府<sup>ふ</sup>相<sup>さう</sup>模<sup>も</sup>郡<sup>ぐん</sup>山<sup>さん</sup>城<sup>じやう</sup>町<sup>ちやう</sup>椿<sup>つばき</sup>井<sup>い</sup>）に<sup>は</sup>、埴<sup>はに</sup>輪<sup>りん</sup>に<sup>る</sup>類<sup>るい</sup>する<sup>もの</sup>の<sup>か</sup>  
 無<sup>い</sup> 奈<sup>な</sup>良<sup>ら</sup>県<sup>けん</sup>桜<sup>おう</sup>井<sup>い</sup>市<sup>し</sup>茶<sup>ち</sup>臼<sup>やう</sup>山<sup>やま</sup>古<sup>こ</sup>墳<sup>ふん</sup>（四<sup>し</sup>世<sup>せい</sup>紀<sup>き</sup>築<sup>ちく</sup>造<sup>ぞう</sup>）の



H30(2018)7/1(月)~7/3(4回)  
H31(2019)2/8(金)~2/28(3回)  
令和元(2019)7/14(水)~7/15(3回)  
令和2(2020)2/24(水)~2/25(4回)

2,637<sup>P</sup>

歌(4)-169<sup>0</sup> ㊦2988<sup>0</sup>

2/15  
2/24  
2/24

後円部につくられた竪穴式石室の上面には、  
石室を囲んで方形状に、口底部に孔をあけた  
壺形の土器が置かれていて、二水が埴輪の  
祖形ではないか。 (一 荒筋 第二編 埴輪 )  
というわけである。 (二 埴輪 第二編 埴輪 )  
において既述) ともあれ、口底部の土器は、  
の時代(三世紀中葉頃)まで遡り得ないよう  
である。

米



「大神神社」138P写真  
②2616 概

2,638P-1/3

災難除 2862P ②2612P ④2616P 末 1999に書いた  
②2848-14

御神火まつり (繞道祭)

先述のよう、

大和の三輪山のお祓い串の御幣は、赤色

である

という。(第四十三章「御神火」の項におい

て既述)

また、

(三輪山の大神社の)社頭では、災難

除けとして、赤御幣を授けられている。この赤

御幣は、大神様の憑り代として、

各戸その入口に立てられる

と云う。(「大神神社」中山和敬、学生社、

一三七頁参照)

大神神社の赤い御幣のお祓い串、そして各戸

の戸口に立てられる小さな赤御幣。こゝからは

恐らく、阿蘇山の御神火の火の色をあら

わいているのであろう。(写真図版431参照)

\*



・あきあきだから、  
この点も、他と同様  
の色にする。

# 神社

神社を黒く  
塗りつぶして  
（近隣の色と同様とする）

・カラー  
・頁の右上。  
（頁の1/4）

$$2,638^p - \frac{2}{3}$$

著作権許諾は、  
上の表だけ結構  
です。

中心部  
1404

写真図版431 大神神社の赤御幣 (赤御幣)

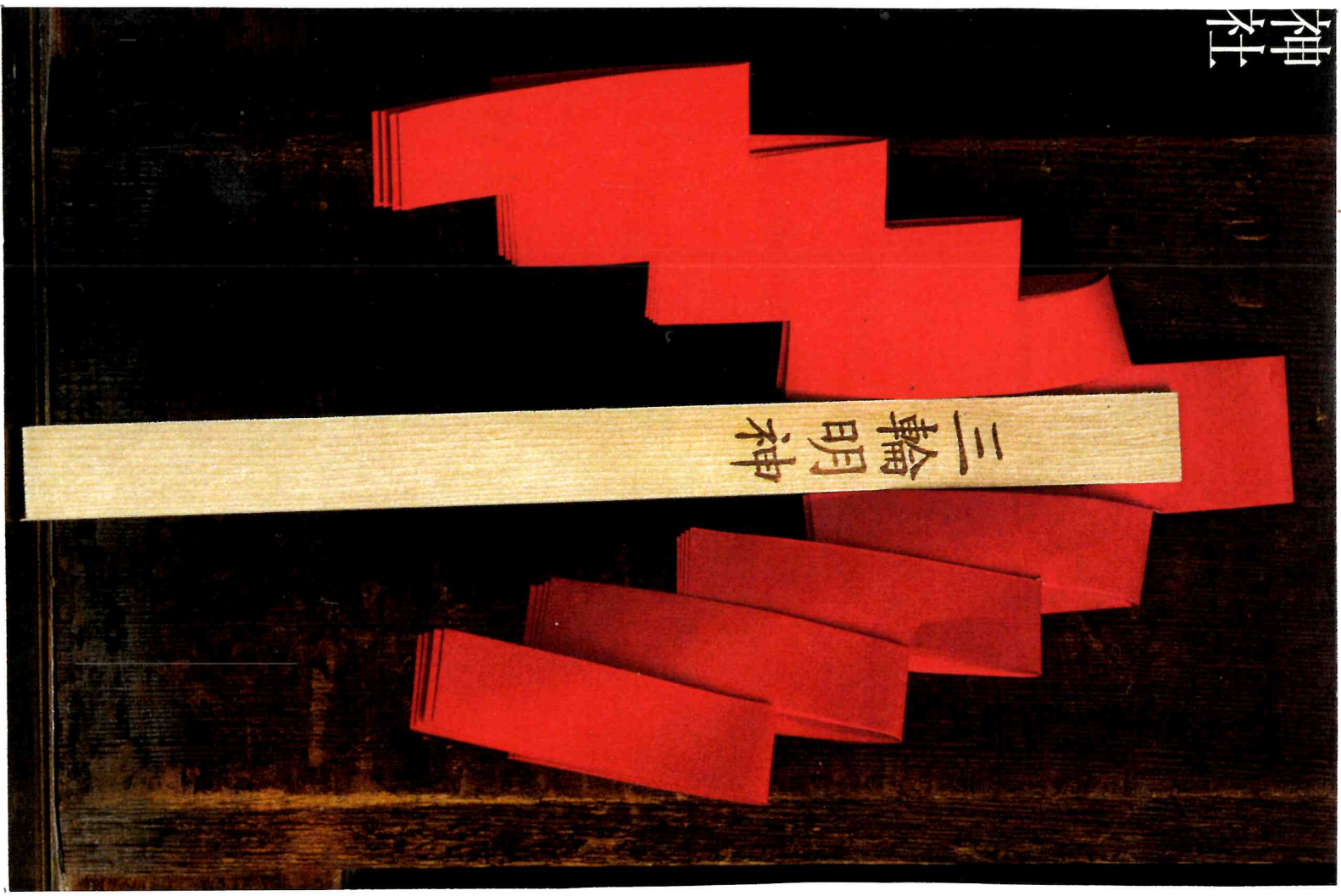
『大神神社』三好和義・岡野弘彦、淡交社、平成16年2月13日発行、113頁

『全国一の宮めぐり』学習研究社、2004年1月15日発行、114頁参照

『大難を小難に』小難を無難にする御幣 玄関先に祀ると『悪事厄災』

家内へ入るのを防いでくれる

2616 195





南1733<sup>0</sup>  
中1737<sup>0</sup>  
北1739<sup>0</sup>

2.638<sup>P-3</sup>/<sub>3</sub>

ニヤ 836<sup>0</sup>  
後夜  
(初夜の反対)

大神神社 172<sup>0</sup> 夜半 紀下156末2行  
入道か 2648<sup>23/2</sup>

大神神社には、

数多くの昔からの祭がある。

名な祭が、繞道祭、御神火まつりである。

●往古以来、後夜(夜半から朝にかけて)の神

事として、陰暦正月元旦、丑刻からこの御神

火祭に奉仕する例であったが、(午前二時)

現在、は、新正月元旦午前一時から執行されて

いる。(大神神社、中山和敬、学生社、一

七二頁参照)

●なお、すでに述べたとおり、

へ往古の人々は、(五三)時の頃、午前

二時頃を一日の起点と定めていたの、

う、

と思われる。(第二十六章へ一日の起点の

項において既述)

●そこで、大神神社の繞道祭、御神火まつり

も、その昔には、一日の起点とされて

いた(丑刻(午前二時頃)からとり行なわれた

のであろう)と想察される。

※



2.639<sup>P</sup>-1/2 改行

$\frac{200}{3.14} \div 63.7$  om

2642<sup>P</sup>  
2848-3/3

大神神社 172<sup>9</sup>

トU

十二月に入ると、神山の枯れた松の樹で、  
数多くの巨大な松明を作り始める。  
● 先入道・後入道と称される二本の大松明は  
実に何と、長さが八丈、太さが二尺もある。  
● また、神饌松明と呼ばれる長さ六丈、太さ  
一丈の中松明一本と、ほか長さ二丈の弱のもの  
六本を誂製する。そして十二月二十四日の早日が  
うおこなわれる。煤松行事のあと、拜殿前の両  
側に飾り付けて、そのまま正月を待つ。〔大  
神神社〕中山和敬、学生社、一七二と三頁参照。  
● なお、  
「長さ八丈もの先入道、後入道が、その先  
端をお山の方へ向けて斜めに、拜殿にたてか  
けられているのは、何とも雄壮なものであ  
る。たし  
と土地の古老はいう。  
「というものであろうか。」

大神神社の本にはさみ込んで

が、二月正月一日には、



祭場  
祭場

大神神庭 173°  
③ 3287° - 148°

178<sup>P</sup>

$$2,639^P - 3/2$$

大神神社 178<sup>8</sup>

宮司 6131

2人林525  
梅利  
福安 1721

2

112

入道が拜殿の両脇に取り付けられ、

＊

この火の祭典の奉仕に当りては、先ず大晦日の午前十時、宮司・権禰宜・神地係の三名により、神山登拝の儀がとり行なわれる。

神に供える飲食物は、御神火拝戴の爲の火打石その他の用具・神饌を三輪山頂上の高宮神社（光の宮神社）という意味なのであろうか）に供えて、新火祭りの口奉告祭を行なう。（「大神神社・中山和敬、学生社、一七八頁参照）

午後十一時四〇分になると、宮司以下禰宜三名、出仕一名が、拜殿の裏、三ツ鳥居付瑞垣の南門から三ツ鳥居の奥の禁足地へと参入する。

この禁足地の祭場において、御神火拝戴のための庭上の祭口拝戴祭が斎行される。



扉を開くこと

由の奉幣

な、お、旧来は古式どおり、火燵ひきり杵きねと火燵ひきり臼うすを用いて忌火いみひをきり出していたが、神氣しんきにもる夜陰やかげの瑞垣みづがき内ない神事しんじであり、樹々ききの生おい茂いる湿気しつかけの中なので、容易よういに火ひが出でず、戦後せんごは火ひ打石うちいしをもつて行おこなゆれてゐる。

真夜中の十二時になると、とうとうと三十三打の太鼓が年男の手で打ち始められる。鳴りを髣髴ほうふつとさせるものである。また、三十三打の太鼓は、新年を迎えるに当たっての先触水さきふづみというべきもののなのであろう。

すでに拝殿前の齋庭さいていはいうに及ばず、まわりの建物、拝殿白拝にぎっしりの人・人・人で埋まった正月一日の午前一時（昔は丑の刻）から、いよいよ御神火まつりと称される年初最大の祭典が始まる。

まず、宮司の「由の祝詞」奏上があり、居の御開扉が行なわれる。

（斎み清めた庭）

た、切り出す  
お、お、お



2,640<sup>p</sup> - 2/2

大神神社 175<sup>p</sup>  
(172<sup>p</sup>)

次頁  
から

三ツ鳥居は、年に一度だけ、この祭の時にのみ開扉される。  
ついで献饌。  
本祝詞があり、これがすむと

もと  
不明



甲寅 H2.1.1 (2夜目の拝観)  
「大神神社」にはさへいる

2.641 P-1/5

かづね  
担ぐ 429 大神神社 175P  
奉が 2018P

H2.1.1 現在の実際の境内  
(前) 2639P 研室 拝戴 前頁

先刻の拝戴祭によつて、燵り出された忌火が、  
三ツ鳥居の前で小松明に移しとられる。  
後、一時四〇分頃となつたとき、拝殿前の先入  
道・後入道(及び神饌松明)と呼ばれる大松  
明に、炎火されるはこびとなる。  
火だ。拝殿の奥から火がやつて来るぞ。  
群集の中から叫び声があがる。火が走る。  
燃えさかる松明を奉じた禰宜が、拝殿の正中  
を通つて拝殿の前へと走り出て来る。(写真図版 432 参照)  
すでにこの頃には、拝殿にたてかけられて  
いた大松明が、氏子達に担がれ、  
先端部を斜め下方にして待ちかまえてゐる。  
先入道・後入道に炎火されるこの一、二秒  
照明は一斉に消され、森厳な浄土の中  
へと、不象ごとくか呑まれてしまふ。  
気があせてゐるからであらうか。なかなか  
火がつかない。しかーついに、三つの大松  
明共に火がともつて、その火はみるみる  
真赤に燃え上つてゆく。(写真図版 433 参照)  
火の粉が空を舞う。

前頁

173P

森厳な象

(中央)



2,641<sup>R</sup> 2/5

・カラー

・右頁上半分に、はみ出て  
限度一杯大きく  
載せて下さい。

・出来るだけ、明るく  
お願いします。



1409

写真図版 432 <sup>たいまつ</sup>松明を手にした <sup>ねぎ</sup>禰宜が、<sup>はりてまえ</sup>拝殿前の <sup>ひろは</sup>庭場へと  
<sup>は</sup>走り <sup>お</sup>降りてくる

1309

『大神神社』三好和義・岡野弘彦、淡交社、平成16年2月13日発行、114頁参照。



2,641P-3/5

1- 左右をくっつけて下さい

・カラー

・右頁の下半分に  
はみ出して大きく  
掲載下さい。



1329 1429 写真図版 433 大神神社 元旦の早朝行なわれる 繞道祭

はみ出し (週刊 日本の神社) 大神神社 デアゴスティーニ・ジャパン 2014年4月日発行 20~21頁参照  
三つ鳥居の奥で神宮によって金簀出された神火が、三つ鳥居・拝殿内を通り、拝殿前の大松明等に点火される

391P



2,641<sup>P</sup>-4/5

・カラー  
・左頁上半分に、  
はみ出して  
限度一杯大至  
掲載下さい。



拝殿前で垂直に立つ  
三本の大松明

1304

1404

写真図版434

はいでXまえ すいなくて た

だいたいまつ

拝殿前で垂直に立つ三本の大松明

『大神神社』三好和義・岡野弘彦 淡交社 平成16年2月13日発行 115頁参照

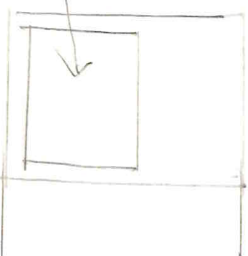




2641<sup>P</sup> 5/5  
 1409 写真図版435 大松明の境内を後にする 大松明  
 1309 『日本100の神社』JTB日本交通公社出版事務局、1988年11月日経、101頁参照。

1309 三本の太松明は、火のついた方を上に持て、舞臺前に垂直に立ち、180度の間隔で立  
 する。その後、各提灯社、末社をめぐり、

左頁の下半分に、はみ出て大きく掲載下さい。





トンドンドンドンドンドン  
● 拝殿の大太鼓が、地軸を揺るかす地鳴りの  
音かと思われ、るばかりに激しく連打され、人  
々はただもうワァーという異様な興奮の渦に  
酔いしれて、この火の祭はたちまち静から動  
へと一転する。  
● 三つの大松明は、火のついた方を上に、  
拝殿前で立ち、南北方向に列を並べて暫の間佇立する。  
● そしてこの間、境内の処々に置かれた二つ  
弱の松明にも次々と点火され、ゆく。  
● 参拝者達は、手にした小松明或は火縄を差  
し上げて、お火をいたたとうと押し合い、も  
み合い、ワァーか斎庭広場は火の海と変る。  
● こうして、正月を迎えた大神神社の境内は  
人々であふれかえり、大松明の出立を前にし  
て、早くも山鳴りのような群衆音に包み込ま  
れてしまっているのである。  
● 八幡、太さ二心もある日先入道、日  
後入道、  
● へ神山の枯れた松の樹で作られて、いる長さ



は、たぶん、入道のような形  
 をしている神（つまり、坊主頭状の神）と  
 いう意味なの（た）ろうう  
 と思われ。

書いて、文々にあえて述べると、  
 へ火が点けられて真赤に燃える坊主頭状の  
 巨大な松明は、実に雄大な、三輪山の神（火  
 男）の陽物をあらわしているものであろう。

と推察される。  
 太くて長大で肌色をしていいる胴部の表面長

手方向に、青筋ともおぼしき青竹が数本配さ  
 れ、頭部が丸みを帯びて赤く見えるその姿は  
 まさに隆隆とした圧巻である。

なるほど詳らかでないが、この先入道・後  
 入道は、いわゆる大物主神の口幸魂・口奇

魂と関連性があるのかも知れない。  
 ・すでに述べた通り、倭人達は、天照大神

を口和魂と口荒魂の二つの玉でもって表

ゆいたように思われる。（神功摂政前紀 第四十一章）

・それとほぼ同様に、倭人の血筋を受け継ぐ

大己貴たちには、



そうき  
想起 2.1283° 小材 398°  
起い起すこと 思ひ出す

2.644°

2634°の左

2639°-1/2

へ倭国流に、三輪山の火男を二つの口火の  
棒で表わすことにしたのであらう。と想像される。  
そしてまた、巨大な坊主頭の先入道・後入  
道・中松明一本・および長さ二倍の松明六本  
は、全てその外観形状が類似しており、  
神山（三輪山）の火男の陽物・幸魂・奇魂  
を頂点とする男神の神々の世界が示されてい  
る。なお、三輪山のこれらの松明の構造につい  
て、参考に簡単に述べておこう。  
①松明の芯ともいうべき青竹（子種の通る道  
に相当する）が、長手方向の端から端まで貫  
通している。  
②その青竹の周りを、断面約一対角の細長い  
半乾きの松材が、ギッシリ分厚く取り囲んで  
いる。松の角材の円柱状に  
③これらの外側（外周）を、肌色をした松の  
薄板が、外皮状（円筒状）にくるりと包み  
込んでおり、表面の長手方向に、青竹が数本配さ  
れており、青筋を想起させる。



せいぎ 精気 1217、  
きえろ 基 1365  
リンリン 演示  
え 2334P  
きまい 基まい  
リンリン 基

2,645P-1/4

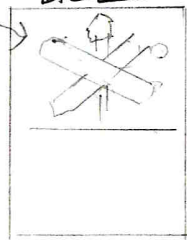
光景 334°  
あいま  
ほうせん 効然 2043P

火が燃え盛つて、いる先端部を上方に向けて  
大神神社の拝殿前に垂直に立てられている先  
入道・後入道、および神饌松明は、  
陽物が勃然と屹立している様子を示している  
のであろう。  
そして、大神神社境内の処処には、陽物を  
思わせる次のような光景が見られる。第335図  
境内の片隅や通路脇などに、日御神火と  
書かれた立札が立てられていて、その立札の  
柱に取付けられている針金の輪が、長さ二  
弱の松明の胴部中央あたりを抱えている。  
●斜め上を向いた松明の火に威勢がなくなる  
と、松明の基部側が持ち上げられる。  
●すると、火がついて、いる先端部は必然的に  
斜め下方を向くことになり、火が斜め上方の  
基部へ向かって燃えあがる。  
●こうして、凜凜とした勢いを取り戻し、精  
気を充分に蓄えた松明は、  
斜め上方を睨んで、頭をもたげる。

写真図版 436・437・438 参照



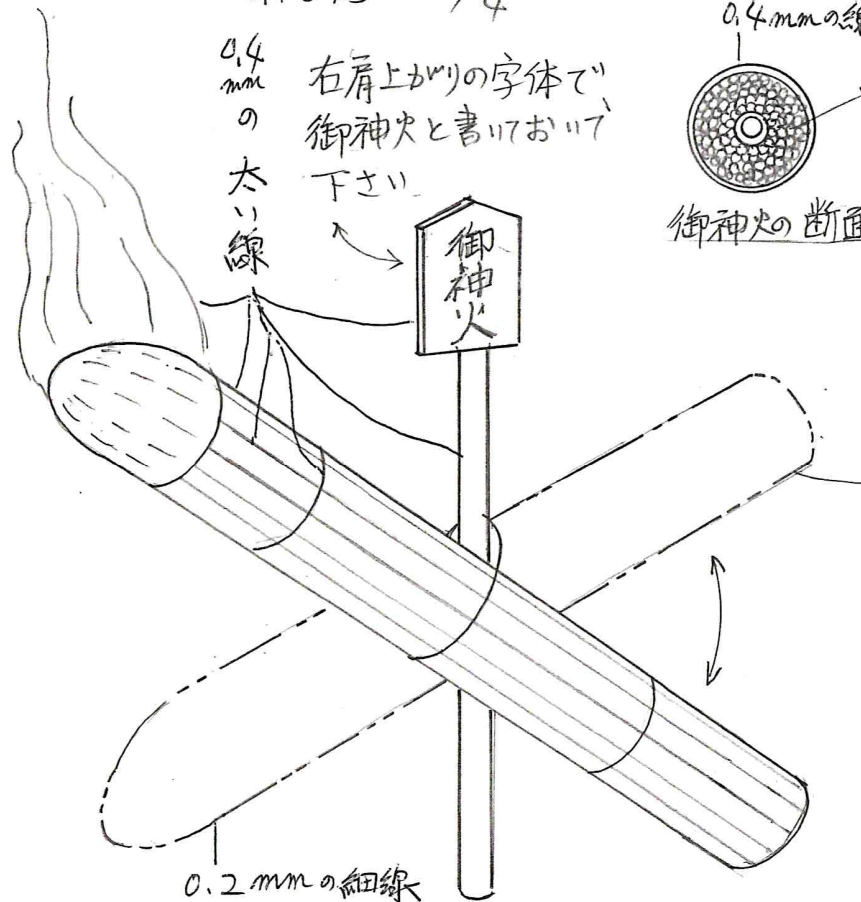
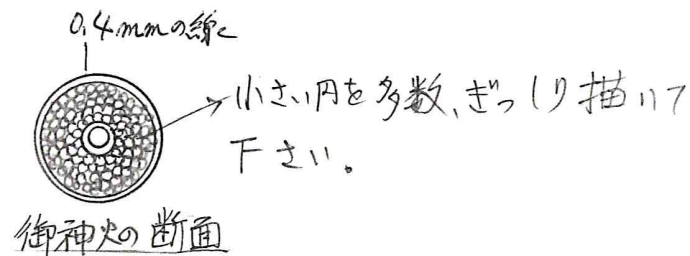
右頁の上半分に  
配置して下さい。



・トレースをお願いします。

2.645<sup>P</sup>-3/4

0.4  
mmの  
太い線  
右肩上がりの字体で  
御神火と書いておいて  
下さい



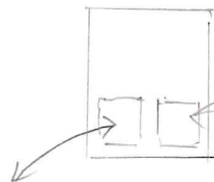
仮想線(—・—・— 状の  
二点鎖線)で描いておいて  
下さい。

1409

第335図 大神神社境内の御神火 (約2×10cm)



・カラー  
 ・右頁の下の方に、又葉を  
 配置して下さい。



2.645<sup>P</sup>-3/4

ヨコレトル



中心ぶりわけ  
 コナ  
 14QG

写真図版437 斜め下方を向く御神火

中心ぶりわけ  
 コナ  
 14QG

写真図版436 御神火の末端部

頁の中心ぶりわけ  
 コナ  
 12QG

平成2年1月1日 著者撮影

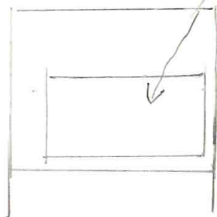
12QG ・中心に、<sup>あおたけ</sup>青竹が見える

■ 表のファイル  
 大神神社のところに  
 ファイルしている



カマド ←

・カマ  
・左側の  
右半分には  
大玉を載せ  
下さし、



2,645<sup>p</sup>-4/4



←

1409 写真図版 438 存在 (ほろ) お (い) た (ご) 神火  
斜め上方を向いて熱立

1209 平成2年1月1日 若者撮景



<sup>2</sup> 実<sup>ク</sup>立<sup>ク</sup> 元1492<sup>2</sup> <sup>ふんせん</sup>「然」小林608<sup>2</sup>  
 ⑤ 2643<sup>2</sup> 奮然 元1979<sup>2</sup>  
 ふんい立<sup>ク</sup> 立<sup>ク</sup>

■ さて、御神火の山の忌火を得て、奮然と燃え  
 える巨大な松明（つまり、大物主神の一物）は、  
 三輪山の中腹の拝殿前に突つ立って、赤  
 い火の粉を噴き上げ、あたりを見廻していた

米

か、  
ー  
ー  
ー  
ー  
か  
し  
それ  
は、  
ほ  
ん  
の  
ー  
ば  
ら  
く  
の

火男は、本能の命にままに、女を求めて

愛する大勢の妻達との溝合（交合）を  
大物主神（火男）は正月元日の一夜の

うちに敢行しようとしたのである。

先入道。後入道。(火男の幸魂・奇魂)は

先導せんどうされながら拝殿はいでん前まえを後あとにする。



南庭広場 ② 2642 「大神神社」 177<sup>ハスウ</sup> 唐櫃 46<sup>ハスウ</sup>  
一目散広 126<sup>ハスウ</sup> 供奉広 640<sup>ハスウ</sup> ③ 2648-1/2 碓氷 706<sup>ハスウ</sup>  
大神神社 177<sup>ハスウ</sup>

より詳しく述べると、  
 被主―神饌唐櫃二名―神饌松明―齋主  
 祭員―太鼓―先入道・後入道（大松明）  
 警備員―供奉者  
 の順序で、拜殿前齋庭の人混みをかきわけか  
 きわけ出発する。（写真図版 435 参照）  
 一物（大松明）は、火がついてゐる側（つ  
 まり亀頭部）を後方へのけぞらせながら、大  
 神神社の摂末社の鳥居（女陰に相当する）を  
 目指し、ただただ一目散に駆けつけてゆく。（写  
 真図版 439 参照）  
 ●巨根を担いだ若者達が走り、神主も走る。  
 太鼓も、供奉者も走る。  
 ●火の粉が正月元旦の暗闇の空に舞い、燃え  
 上りの松材が炎をあげながら四方に飛び散  
 る。  
 なお下  
 この日火のおわたり口の奇観は、  
 上り下りの多い曲りくねった山道（山の辺の  
 道）へ上つ道の東側の小道）  
 で繰りひろげられてゆく。

袋二

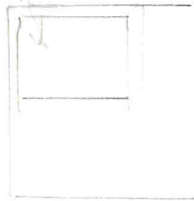
④  $2648^{n-2/2}$   
457



2,645P-2/2

→ カット

・ カラー  
左頁の上半分に  
大きく載せて  
下さい。



1409 写真四版 439 一目散に駆けつけてゆく大松明 <sup>いちめんに</sup> <sup>か</sup> <sup>たいたいまつ</sup> <sup>たいこ</sup> 太鼓も走る <sub>10</sub>  
1209 平成2年1月1日 著者撮影 403P

→ カット



いんのう  
陰囊 193P  
電陰囊

せつやろ  
本社に象徴の深い  
神を祀る。

2648<sup>P</sup>-1/5

鳥居=女陰 2647<sup>P</sup>-1/2 中央  
2650<sup>P</sup>-3/

板  
2648<sup>P</sup>-3/5 441  
2648<sup>P</sup>-4/5 442 参照

H 26  
2014  
1/18  
大和神  
神職  
上も下も白だという。

また、明治時代までは八社のみを巡っていたが、現在は十八社にふえている、という。  
先入道・後入道は、いよいよ盛んに、青筋をたてて燃えつづける。  
● 恐らく、  
「攝社末社の神域を、女性の腹部」  
「鳥居を、陰門」  
に見立てているのであろう。  
● 激しいばかりの男振加、延延と繰り返さ小  
● 小さな末社の場合は、一つの大松明のみが  
鳥居をくぐり、火を上にして立てられる。  
● 大きな攝社の場合は、三つの松明および奉仕者全員が鳥居の内へ入る。  
● こうして、一社ごとに、大きな布製の（陰囊に相当する布袋から、歓喜の雫を象徴するような日御花餅と呼ばれる白い小判型のお餅）二つを上下に重ねて縛ったものが取り出されて、社殿に供えられる。（写真因

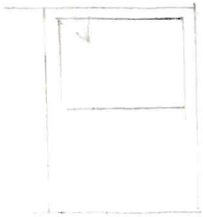


2.648P-2/5

→ カット

・ カラー

・ 右側の上半分に  
大きく載せて  
下さい。



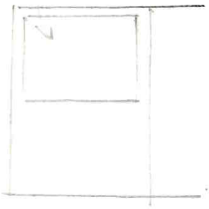
1409 写真四版 440 一つの大松明が鳥居をくぐり、火を上にて立つ  
1209 平成2年1月1日、著者撮影 405P

→



・カラー

・左頁の上半分に  
大きく載せて  
下さい。



置土産の御花餅が  
あり、鳥居の外で  
大松明が満ちて  
佇む。

1409

写真図版 44.1 置土産の御花餅があり、鳥居の外で大松明が満ちそうに佇む

1209 平成2年1月1日、著者撮影

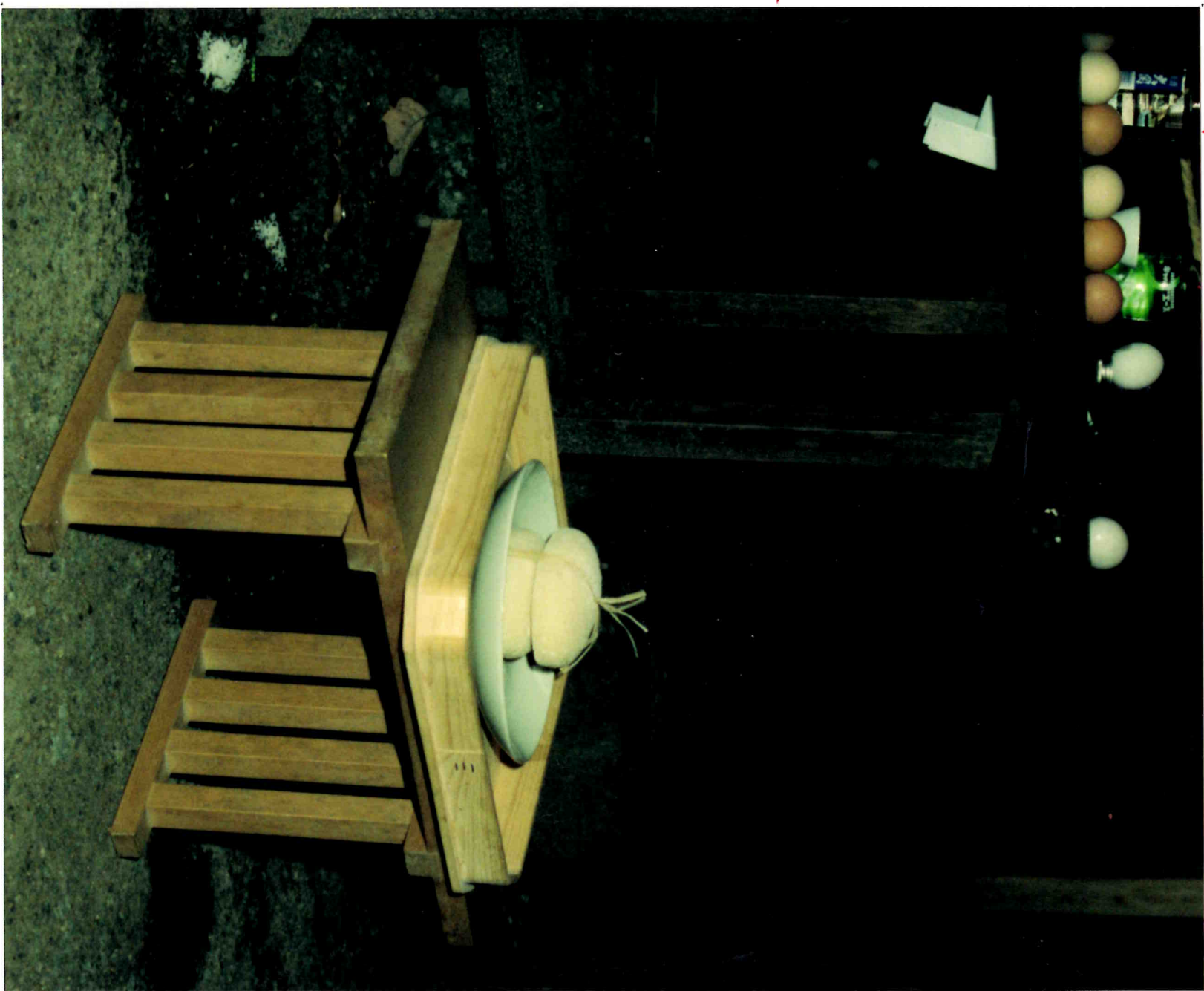
406<sup>P</sup>



カット ←

カー  
左側の  
下半分  
載せて  
下さい  
↑  
カ  
↑

2,648<sup>P</sup> - 4/5



407

カット ←

カット ←

1409 写真図版 442 御花餅

407<sup>P</sup>

1809  
御花餅は、上・下二つ、  
平成2年1月1日、著者撮影  
（平成26年11月18日、大神神社神職者言談）



6



H30(2018)7,2月)〜  
7,3(4回) 何となく  
H31(2019)2,9(土)〜2,9(3回) ながい  
令和元(2019)7,15(土)〜7,16(3回)  
令和2(2020)2,25  
(土)〜2,27(4回)  
令和2(2020)11,7(土)  
〜11,8(4回)

歳旦 元旦 2,649<sup>P</sup>

1121 1121 538 トウ171<sup>P</sup> 大神神社 176<sup>P</sup>

1/8 1/8 1/8  
(\*)

大神神社の淨火を争っていただく  
という風習は、古くからの伝統であり、移火の  
連に、よってその年の吉凶がトわれる。  
と、いうわけに、正月の早朝、自分の村へ一  
番にお火を持ちかえつた若者は、その村の英  
雄としてたたえられ、米何俵とか、酒何本と  
かが贈られ祝福されていた。これは、ごく最近  
まで、つづけられてきた慣わしだった。  
一方、大神神社境内の処々に燃える御神火  
から移しとった小松明や火縄を手にする人々  
は、各自その火を打ち振りながら、家路を急  
ぐ。  
あ、い、め、い、家に持ち帰った御神火は、ま  
ず、元の神棚へおひかりと、あ、げ、られ、  
煮、を、炊、く、豆、が、ら、に、点、じ、ら、る、順、序、と、な、る。  
て、大、神、様、か、ら、い、た、だ、き、や、が、て、一、家、打、ち、そ、ろ  
て、新、年、を、お、祝、い、す、る、と、い、う、昔、な、か、ら、の、床  
し、お、祭、り、で、あ、る、。へ、大神神社、中山和敬

カズミ 移火イ